

令和2年3月6日

あきる野市議会議長 殿

会 派 名 明るい未来を創る会

代 表 者 合 川 哲 夫



会派の（調査研究・研修）報告書

このことについて、下記のとおり実施したので報告します。

記

1 調査研究または 研修実施日	令和2年2月15日（土）
2 調査研究または 研修の場所	近畿中国森林管理局 4階 大会議室
3 調査研究事項 または研修名	森と自然を活用した保育・幼児教育を考えるシンポジウム
4 参加者氏名 （ 1名）	中村 のりひと
5 調査研究または 研修の概要及び 感想等	別紙のとおり



(別 紙)

【概要】

基調講演

「乳幼児期における園庭・地域資源を活かした自然体験や外遊びのススメ～全国実態調査より～」

石田 佳織

(園庭研究所 代表 東京大学発達保育実践政策学センター園庭調査研究グループ)

事例報告

(1) グラウンドだった園庭を、土壌改良・樹木の植栽によって樹林化

鑄物 太朗 (関西学院幼稚園 副園長)

(2) 市街地の公園 (津雲公園) を活かした森のようちえん

田畑 祐子 (森の子教室 代表)

(3) 行政や自治会と連携した森のようちえん

岡本麻友子 (森のようちえんウィズ・ナチュラ 代表)

(4) 幼稚園への出前木育 (木材利用に関する教育活動) 授業

米地 徳行 (NPO 法人 木育フォーラム 理事長)

正田 智美 (大阪市立両国保育所 施設長)

(5) 庭園に生き物が集う空間づくり専門家の活動

小泉 昭男 (京都女子大学 非常勤講師、小泉造園 代表)

(6) 各園が連携した「森と自然を活用した保育・幼児教育」の推進

長尾 鮎子 (関市健康福祉部子ども家庭課)

乾 千穂 (関市立田原保育園 園長)

パネルディスカッション

進行：山崎 春人 (NPO 法人 日本森林ボランティア協会 理事)

メンバー：事例報告者

【感想】

今回のシンポジウムのテーマは「森と自然を活用した保育・幼児教育を考える」。あきる野の地で推進していくことによって、様々な観点から相乗効果が生まれると思い今回の研修を選んだ。

当市の保育園・幼稚園等の状況は少子化もあり、いわゆる待機児童はいるが、地域的なミスマッチが第一義的な要因と考えられるが、園の教育保育の中身によって保護者の選択もはじまっている。現状、秋川流域 (あきる野市、日の出町、檜原村) でいわゆる森のようちえんは檜原村にある「やまっこかわっこ」、日の出町にある大久野幼児園である。(あきる野市のころりん村幼児園は今回は外しておく)

幼保無償化により、金銭的差ができるこれらの園が来年度どのような状況になるかはわからないが、森のようちえんの要素をもつ公立保育園や認定子ども園の形態が取れば、子どもの確保はできると考える。子どもと共に保護者の需要に対して的確に供給することが求められる。

このシンポジウムの中で園庭の活かし方が数名の事例報告者から発せられた。普通にある既存の遊具で「遊ばされている」ではなく、園庭をかつての裏山のような場所にし、森に入っていかななくても、森での遊びと同じような遊びができる園庭に、現在進行形の話があった。当市の場合、ほとんどの保育園や幼稚園等では、少し歩ければ森や川や林、畑や田んぼもある環境がまだ残っている。色々な話を聞きながら、これは非常に恵まれている環境であるし、それが活かしきれていないとも感じた。様々な制約等がある中では、割と近くにあると言っても安全性という観点から無理はしない園がほとんどだと思う。

関市では公立園が10園あり、その10園がチーム森活動を行っている。保育士13人と子ども家庭課1人の集団で、自分たちが、体験して学んだこと、研修や講演会に行ったことをチーム森のメンバーで共有し、それを自園に持ち帰ってみんなに発信している。そしてまた森会議で報告しあい、自分たちが主となり自然の中でのあそびが深まるようにしているとのことでした。これは非常に素晴らしい取り組みだと感じた。当市は公立園3園だからより実践しやすいと思う。また関市では農林課とも連携していると伺った。庁内で横の連携が生まれるのも素晴らしい。一度実際に視察に行きたいと思う。

非認知能力という考え方が定着する中、今後の当市の公立保育園のあり方を考えるいい機会になった。

